

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 16 日現在

機関番号：17201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23780234

研究課題名（和文）茶業における消費ニーズ適合的な生産計画・販売戦略の構築に関する研究
 研究課題名（英文）A Study on Consumer-conscious Planning of Productions and Sales in the Tea Industry

研究代表者

西 和盛（NISHI KAZUMORI）

佐賀大学・農学部・特任助教

研究者番号：40444781

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、茶産地における地域的な特徴・課題について、生産・加工・流通・消費の側面から明らかにし、産地に適合的な茶業のあり方を提案することである。研究期間内に、国内外の現地調査による茶の生産・加工・流通に関する地域別の特徴や課題の整理、アンケート調査による消費者の飲料消費等の把握、「経験」と「消費」の因果関係の解明を行った。また、積極的に報告・論文執筆を行ってきたことで、研究成果を社会化することができた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to reveal the characteristics and the issues of the tea industry by region, and to give some suggestions of consumer-conscious planning of productions and sales. The achievements of this study are the followings.

1. Revealed the characteristics and the issues of the tea industry by region.
2. Came out the consumers' behavior to beverage consumption, and cause-and-effect relationship between the consumers' experiences and consumers' behavior
3. Reported the results of all the above.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：農学

科研費の分科・細目：農業経済学・農業経済学

キーワード：マーケティングリサーチ、フードビジネスマーケティング、消費者行動、SEM、茶のマーケティング、産地戦略、茶業経営、フードシステム

1. 研究開始当初の背景

わが国における「飲茶」の習慣は根強く、緑茶は、日本人の生活において重要な位置を占めている。一方、消費者は「淹れて飲む」よりも「簡単に飲む」傾向を強め、リーフでの購入は減少し、ペットボトル等飲料での購入が増加している。

生産における変化をみると、リーフ形式の茶葉として利用される一番茶、二番茶の生産が減少基調にあり、ペットボトル等飲料用に仕向けられる三番茶、秋冬番茶等の生産が増加傾向にある。また、緑茶飲料メーカーによ

る生産部門への参入がみられるようになり、ペットボトル等飲料用への原料供給生産がますます増加する傾向にある。

茶産地をとりまく環境の変化の影響から、茶価は低下を続けており、特に伝統的茶産地に大きな打撃を与えている。このため、各産地において、生産体制の見直しや販売戦略の方向転換等も含めた生産計画・販売戦略の構築が急務となっている。一方で、日本国内に存立する茶産地は、各々に大きく異なる生産～販売のシステムを有している場合が多く、環境変化に対して地域限定的な対応となら

ざるを得ない。茶業経営の地域的な特徴や相違の存在と重要性については広く認知されているものの、各々の関係について、より具体的に、より相対的に、位置づけを明らかにした研究はみられない。

そこで、本研究では、日本国内における主要茶産地を対象として生産から販売までの特徴および課題について、文献研究・統計的分析・実証的分析によって明らかにする。さらに、都市住民や海外の消費者の消費動向を明らかにした後に、各茶産地の特徴や課題に基づいた生産計画・販売戦略の提言を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本国内に広く存在する茶産地における地域的な特徴・課題について、生産・加工・流通・消費の側面から明らかにし、各産地に適合的な茶業のあり方を提案することにある。茶産地をとりまく環境は他の農産物産地の例にもれず、グローバル化や消費ニーズの多様化に直面しており、茶業経営体あるいは産地全体の競争力を高めていく必要がある。本研究によって、苦境に立たされている茶業経営体・茶産地全体の生産計画・販売戦略構築の一助となることが期待される。

3. 研究の方法

本研究では、①茶産地の類型区分を文献研究・統計的分析および現地調査に基づく実証的分析によって行い、生産・加工・流通上の特徴・課題を明らかにすると同時に、②日本国内の都市や海外の都市の住民を対象とした現地調査やアンケート調査を実施し、緑茶の消費動向や消費ニーズの実態を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

23年度は、まず茶業経営の現代的な位置づけを把握するために、既往研究の整理を行い、本研究の位置づけをより明確にした。さらに、静岡県、福岡県、鹿児島県等で、行政、茶の生産者や茶工場、茶商などの流通業者、茶生産に参入した企業等へ聞き取り調査を行い、これによって、茶の生産・加工・流通に関する地域ごとの特徴や課題を整理した。また、韓国でも現地調査を行い、海外の動向に関する知見も得た。これらの成果について、11月にインドネシアで開催された The International Society for Southeast Asian Agricultural Sciences (ISSAAS (東南アジア農学会))において報告を行った。

24年度も引き続き、現地調査を進めることに加えて、Webを用いた消費者調査を行い、消費者の飲料消費の傾向、ブランド認知、茶に関する経験とリーフ茶飲用の因果関係な

どを明らかにした。これらの成果は、日本農業経営学会等において報告を行った。以上の研究をつうじて、当初の目的のかなりの部分が達成されたと考えられる。また、産地でも積極的に報告を行ってきたことによって、研究成果を一定程度社会化することができたものと考えられる。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

ここでは、前述の「茶に関する経験とリーフ茶飲用の因果関係」を明らかにした成果について記述する。

この成果は、消費者がリーフ茶を選択する要因としての「茶に関する経験」に注目し、茶に関する経験がリーフ茶の消費・購買の行動に与える影響を明らかにすることを目的に行った研究である。具体的には、リーフ茶に関する全国アンケート調査をもとに、①リーフ茶の消費や購買の実態、②茶に関する経験、を明らかにし、③茶に関する経験とリーフ茶の消費・購買の行動との間の因果モデルについて検討を加えた。

① リーフ茶の消費や購買の実態

リーフ茶を飲用しているのは全体の約 80% であり、緑茶ドリンクよりもリーフ茶を飲用しているのは、そのうちの約 45% である。また、好きな飲料としての「1位」にリーフ茶を挙げている回答者は 32.8% で、コーヒー (40.1%) に次いで高く、緑茶ドリンク (14.0%) を上回っている。

リーフ茶の購入場所、購入する茶葉の種類、購入価格帯、購入基準について、自宅用・贈答用別に回答を得た。相違点として、以下の結果が得られた。購入場所では、自宅用で「スーパーマーケット」の回答割合が圧倒的に高かった (57.2%) のに対して、贈答用では「購入しない」が最も高く (32.2%)、「百貨店」 (21.8%) の回答もみられた。茶葉の種類では、自宅用と贈答用のいずれにおいても「普通煎茶」「深蒸し煎茶」の回答割合が高かった。その一方、3位以下をみると「玄米茶」「ほうじ茶」の回答割合が高かった (32.4%、31.7%)。自宅用に対して、贈答用では「玉露」「玉緑茶」が高い (31.5%、18.8%) という相違点もみられた。購入価格帯では、自宅用で 1,000 円以下が大半を占めていた (75.5%) のに対して、贈答用で 1,001~2,000 円の価格帯の割合が高かった (52.9%)。購入基準では、自宅用で「安全性」「低価格」を重視する割合が高かった (61.3%、59.1%) のに対して、贈答用で「高級感」「生産地・銘柄」を重視する割合が高かった (80.3%、77.0%) ことが差異としてみられた。

② 茶に関する経験

(2)新開章司・西和盛・横山繁樹・櫻井清一、
米国における CSA の変容と新たな展開－北東
部とカリフォルニア州の事例から－、日本農
業経営学会（宮崎市）、2012 年 9 月 20-22 日

(3)Kazumori NISHI, Shoji SHINKAI and
Kazuhiko HOTTA, Foreign Trainees as Labor
Force on Agriculture in Japan-the
characteristics and the issues of the
system for foreign trainees-, The ISSAAS
International Symposium and Congress 2011,
2011.11.9（ボゴール、インドネシア）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

西 和盛 (NISHI KAZUMORI)

佐賀大学・大学院農学研究科・特任助教

研究者番号：4 0 4 4 4 7 8 1